

入選

白いつえのおじさん

東京都 暁星小学校

五年 矢部 玄馬

「あっ！あぶない！」

思わず、ぼくはさけびました。スピードを落とさずに、すごい勢いで曲がってきた車の音におどろいて、白いつえを投げだし、よろけてしまったおじさんがいたからです。犬の散歩をしていたぼくとお母さんは、あわててそのおじさんに向けより、白いつえをひろって体を起こしました。おじさんは目が不自由で黒いサングラスをしていましたが、サングラスの下の表情がこわばっているのがわかりました。

「ありがとうございました」と言って、うけとった白いつえをつきながら、ゆっくりと歩いていきました。これがぼくと白いつえのおじさんとの最初の出会いでした。

その日から、ぼくが犬の散歩をしていると、よく白いつえのおじさんに会うようになりました。目の不自由な人と接するのが初めてだったので、会うたびにドキドキしましたが、白いつえのおじさんの姿が見られないときは、犬の散歩ルートを歩きながら、おじさんを探すようになっていました。そして、だんだんおたがいを名前で呼ぶようになり、会うたびに、おじさんの笑顔が増えていきました。

ぼくは、もっとおじさんの役に立ちたいと思うようになりました。パソコンを開いてネットで「視覚障がいのある方への声のかけかた」を調べました。そこには、「話しかけるときはまず名乗ること」「えん助するときは前方から声をかけること」などが書かれていました。

それからは、話しかけるときはおじさんをおどろかせないように、前方から名前を伝えて声をかけるようにしました。

ある日、家の近くの十字路で、白いつえのおじさんがじっと動かず、ぼう然と立ちつくしているところを通りかかりました。お話を聞くと、小さな子どもの声が急に聞こえたので、その子につえが当たらないように、あわてて道のはしの方によけたタイミングで車が通り、びっくりしてどの方向に何歩歩いたのかわからなくなったこと、いつも角から次の角までおよそ何歩かを考えながら歩いていること、などを教えてくれました。

ぼくはおじさんの家までいっしょに歩きながら、「視覚障がいのある人が健常者に思いやりをもっているのに、健常者は視覚障がいのある人に思いやりをもてないなんて…」と悲しく思いました。ぼくの中で、「白いつえのおじさん」が「近所のやさしいおじさん」に変わっていきました。そして、「本当の親切」を教えてもらった気がしました。

このまえ、おじさんと出会ったとき、めずらしくこうふんして、

「コロナが落ちついたら、目の手術をするんだ。そうしたら、下の方が少し見えるようになるかもしれない！」

と話してくれました。おじさんと出会ってから初めて聞く、うれしそうな声でした。

ぼくは、一日でも早いコロナの収束を願っています。一つはみんなの世界平和のために。もう一つはおじさんの手術のために。